

開催地名	神奈川県大和市
開催日時	令和6年2月3日（土） 10:45 ～ 11:50
開催場所	大和市文化創造拠点シリウス内 芸術文化ホール(メインホール)
語り部	大内 幸子（宮城県仙台市）
参加者	大和市危機管理課、消防本部予防課 332名
開催経緯	大和市では、火災や自然災害から、自らの命とまちを守る自助と共助の活動を推進し、自主防災活動の充実及び防火・防災に関する知識の向上を図ることを目的に、毎年2月に、「防火・防災講演会」を開催している。
内容	《震災の教訓から学んだ地域防災の重要性和多様な視点の避難所運営について》 <福住町の防災・減災の取り組み> 1. 宮城県福住町に在住 2. 3.11の震災時の経験を生かし防災、減災の取り組みを行っている 3. 仙台市福住町は仙台市の北東部に位置し下北田川と梅田川に挟まれた新興住宅地 4. 海からは6キロ離れている地域 5. 人口1500名、町内会加入世帯427 6. 過去に台風による豪雨災害を何度か受けている 7. 昭和61.8.5におきた台風10号による被害状況は降水量402ミリ、仙台市.死者5名 床下床上浸水32,975戸 8. その時福住町全戸が床上、床下浸水の被害を受け仙石線も水没.水深3mにもなり多くの車が水没し2階に取り残された住民、高砂小学校に避難したが体育館も浸水、校舎の1階も浸水当時自主防災組織もない、避難所運営もない状況であった <数々の災害から自分たちの町は自分たちで守る> 1. 地域の行政機関も同じように災害に際しており、救助に来てもらうことは不可能である状況を体験したことから行政に頼ってばかりでなく行動すること考えた。 2. 福住町独自のマニュアルを作成、2003年には住民全員の名簿を作成 3. 高齢者宅の家具の転倒防止取り付けを行ったり、危険個所のマップを作成し見守りを行う 4. 備蓄倉庫の管理（防災用品・防災食） 5. 災害支援ボランティア活動（新潟中越地震の支援活動を行った）この支援が後に3.11の時に恩返しとなって新潟県小地谷市の方々が物資などの援助をしてくださった 6. 上記に経験から、仙台市内の町内会・市民グループとの「災害時相互協力協定」を終結する（見知らぬ人の支援より意思疎通がより安心して援助を受けやすかったの）と言っても、お互いに出来る範囲内での支援と交流をすることになっている（既に14団体と協定を終結している） 7. 日頃からコミュニケーションを図っておくことは災害時など、慌ててしまいがちな時

に落ち着いて安心して対応する事出来ることも経験した

<東日本震災を忘れない！>

1. 死者・行方不明者 22,215 名、・2 時 46 分発災
2. 日頃から防災訓練を行っていたからか、普段の訓練の通りに動けたと思う
3. まず安否確認、町内要支援者の安否確認（避難行動要支援者）
4. 住民の避難誘導・呼びかけ
5. 災害緊急対策本部の立ち上げ
6. 避難所の開設
7. 炊き出しの準備
8. 公園に手作りトイレと災害時瓦礫置場に設置
9. 卒業式の目前にした中学生達が水汲みや幼児の面倒をみてくれて大活躍だった
10. 避難所は高砂小学校と福住集会所の 2 か所
11. 小学校に 500 人の収容に対して帰宅困難者を含み 2000 人近くが避難してきた
12. 集会所は高齢者を主に小さな子供がいる人たちを主に避難させた
13. 避難所には仮設トイレはあったが外にあり和式であった
14. 徐々に全国から支援物資が届き始めた時とても嬉しかったし、ありがたかった
15. 3 月 18 日には体育館には沢山人々が避難生活をしていたが、学校と地域役員、避難者の方たちの理解の元、手作りの卒業式を執り行うことが出来た。
既にこの時の小学生は成人式を超え今度は自分たちの経験を次の世代に語ったことが出来る人事となってきた

<災害時の自助・共助の重要性>

1. この震災を通して思ったことがある、それは災害の規模が大きければ大きいほど公助には限界があり、自助・共助の取り組みがとても重要である
2. 災害が起きた時に救助を待つだけでなく、各家庭が各自で出来ることからそして次に地域住民がお互いに出来ることから助けあうことが大事と感じた
3. そしてもう一つ大事だと感じたことは、日頃からの訓練だと実感したどうしても震災時は慌ててしまうが、出来るだけ災害訓練をしておくことが最良ではあるが、その機会がなかった場合でも日々訓練をしている人から災害時の行動について話を聞いたりにしているだけでも、少しずつでも落ち着いて行動することが可能である。

<震災の教訓からの取り組み>

1. 日常の取り組みと訓練が災害時に力を発揮することが実感できた。
2. 震災時は地域の運営を男性が行うことが主であったが、3・11 の際にも改めて女性線の重要性・災害時の対応能力の必要性を感じた。
3. 災害時には女性の視点に立った防災・減災が必要と感じ福祉・救護・防災・減災等、沢山学びたいと思った。

4. そこで仙台市地域防災リーダー(SBL)認定・女性のための防災リーダー養成講座受講(せんだい女性防災リーダーネットワークを立ち上げ)総務省消防庁『防災意識向上プロジェクト』語り部として東日本大震災の教訓と人の命の大切さ、備えなどを全国に発信したい・学んだ知識を地域で発揮したい!と行動に至る。
5. 2015年3月17日には国連防災世界会議において、災害時には女性リーダーが必要であるとSBLとして発表をする機会を得た。

<震災後の取り組み>

1. 仙台市地域防災リーダー(SBL)の養成を支援
2. 仙台市がSBLを活動しやすいように支援をしている(バックアップ講習会・名簿を学校と町内会長に提示)
3. 仙台市独自の防災診断DIG、5年以上活動出来ること等を条件として仙台市の防災リーダーとして受け入れを行っている
4. 令和4年度6月末現在で848名の防災リーダーうち212名が女性である(まだまだ女性が少ない)
5. 平常時防災リーダーは、防災マップ作り、自主防災計画(アクションシート)作成指定避難所運営の協議・学校との連携、地域住民に対する情報提供・啓発活動、地域防災リーダーとしての情報交換などの活動をしている
6. 発災時は、住民の安否確認、情報収集・伝達、避難誘導、初期消火、救出救護避難所の開設・運営を行う
7. せんだい女性リーダーネットワークは養成講座を修了時に修了生が立ち上げそのメンバーは、町内会役員・学校支援関係者・民生委員・防災士・市職員・SBLのメンバー現在72名からなる
8. 月一度各区定例会・月一の各区代表者会議を開催している
9. リーダーは、各種防災講座やイベントを開催し、色々な切り口から楽しく防災を学ぶワークショップ等も開催し、女性ならではの視点とリーダーシップを活かしながら地域防災力を高めている
10. 老若男女や多様な人々との交流を図り、地域に根差した活動を平成26年から始めている

<防災・減災に必要な地域のつながりの基盤は夏祭り>

1. 若者の参加を促すには、子供会役員、中学校役員、婦人防火クラブ、お父さん達を夏祭りなど楽しいイベントの後そのまま防災訓練にスライドして参加してもらう
2. 子供を通して防災訓練に参加してもらう等の工夫をしている
3. 共働きなどで災害時に子供の引き取りが大変だった経験から、学校での防災訓練を行う際には保護者にも「引き渡し訓練」に必ず参加してもらっている
4. 訓練の中で、簡易トイレの組み立てなども学ぶことができる

	<避難所の環境整備> 1. 受け付けは避難者名簿の徹底（コロナ対策だけでなく、不審者が入り込まないように） 2. 世帯ごとのパーテーションをもうける 3. 簡易トイレは7：3の割合で洋式がふえた 4. 警察が避難所の見回りにきている 5. 更衣室、授乳室は中から鍵のかかる部屋 6. 運営体制→女性の参画、声を反映できるように 7. 女性用のデリケートな支援物資の配布場所 8. ペット同伴避難（部屋を設ける等） 9. 食事作り、片付けなどが性別に偏らないようにマニュアル作成づくりに女性も参画 10. 指定避難所である小学校の備蓄倉庫の点検に、女性の参画。 <災害が起きたら> 1. まずは自分の身を守り逃げる道の確保（玄関・窓を開けるなど） 2. 慌てて飛び出さず、ラジオ・テレビ等で情報を集める 3. 災害が起きた時困らないだけの食料や防災グッズをよういしておくことカセットコンロはとても役に立った経験から備蓄しておくといよい。 4. 必ずしも避難所に行くことは正しい避難ではなく、安全であればできるだけ各家庭にて避難をすることも避難になる（在宅避難の勧め） 5. 家庭の状態を友人や知人に日頃から話しておくのもお互いに助け合うことも可能になる <最後に> 1. いつでもどこでも災害はやってくるのだから、普段から災害が起きた時のとるべき行動について話をしておくといよい 2. 持続可能な防災・減災の取り組みを継続することでいつか役に立つ時がくる
開催地より	参加者からは「日常からの準備を大切にしたい」「ぜひ地域に持ち帰って今回の講演内容を広めたい」という話を多数いただいている。 今回の講演を参考にし、今後の自主防災組織支援や、地域防災力の向上について取り組んでいきたいと思う。